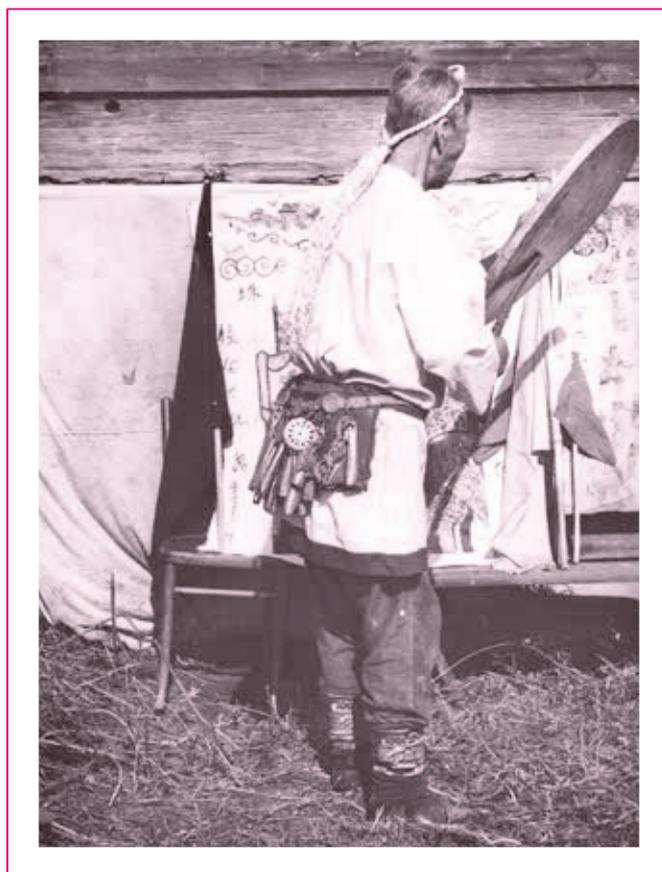




北方民族博物館だより

No.121



S166 写真 ナーナイ ロシア/ハバロフスク地方/ジャリ
17.9×13.0cm 1970年、A. V. スモリャーク撮影

民族学者A.V. スモリャーク氏が1993年（平成5年）に第8回北方民族文化シンポジウムに出席した際に当館へ寄贈された資料の一部である。ナーナイのシャマンM.T.オニカ（Molo Timofeevich Oninka）氏が太鼓を打ち鳴らす様子が写されている。頭には削り掛けでつくられた頭飾り、腰にはいくつもの金属片がついたベルト、背景にはナーナイで神聖とされた布片（ミオ）の一部が見てとれる。このミオの図像や文字は、オニカ氏本人が描いたものだという（本誌3頁も参照）。

目次 Contents

- 1 表紙 写真
- 2 新館長就任挨拶「ことばを通じたモノへの道先案内」
／講座「川西オホーツク遺跡の再検討」
- 3 ロビー展「A.V. スモリャーク写真展：ロシアの民族学者がみた1950～70年代のナーナイの暮らし」
／移動展・ギャラリートーク「北方民族の釣針」
- 6 INFORMATION

新館長就任挨拶

ことばを通じたモノへの道先案内



このたび、館長を拜命した呉人 恵くれびとめぐみと申します。私は、ロシア連邦カムチャツカ半島からマガダン州にかけて話されている話し手2,000人に満たないコリヤーク語という言語の研究を続けてきました。故津曲敏郎前館長は、当館オープン当初から、自らツングース系民族資料の収集に当たるかたわらで、各地から収集された資料を評価する資料収集評価委員を長らく務められていたと伺っています。私がツンドラの奥地から集めては当館に送ってきたコリヤークの民族資料の評価にも前館長が関わっておられたことを思うにつれ、それらのモノたちも、そして私自身も、当館と不思議なご縁で繋がれていたのだと思わずにいれません。

さて、私の研究は、コリヤーク語の音韻・文法の記述です。たとえば、音韻体系にはどのような特徴があるのか、語はどのような手段で作られるのか、文中で語同士はどのように配列されるのかなど、コリヤーク語という言語そのものの仕組みの解明が、私の研究の主たる目的です。しかし、その一方で、2000年以降、ツンドラのトナカイ遊牧地で調査をするようになってからは、コリヤークの物質文化、とりわけ、多種多様なモノがどのように命名され、その命名にコリヤークの資源観や世界観がどのように反映されているのかという、言語人類学的な関心を持つようになりました。自分自身の研究上の知見を当館運営に多少なりとも役立てられるとしたら、それは、モノとモノをめぐる情報の介在者としての名前=ことばを切り口に、モノの背後に秘められた奥深いストーリーへの道先案内をすることではないかと考えています。

現代の博物館には、収集・保存・展示という本来の役割に加え、地域や教育現場への貢献といった社会的役割も強く求められ、その在り方も多様化しています。加えて、来るべきポストコロナ時代には、遠隔からも鑑賞できる、デジタル技術を駆使した新たな展示方法の開発に、より一層注目が集まることでしょう。

とはいえ、対面であれオンラインであれ、すでに生活の中では役割を終えたモノたちに新たな命を吹き込み、これらのモノを通じて来館者の皆様に異文化体験の醍醐味を味わっていただくという博物館の根源的な役割は、決して変わらないはずです。微力ながら、モノを通して、いかに北方民族の豊かな世界を描いていけるのかを、スタッフとともに追求していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

(館長 呉人恵)

講座

川西オホーツク遺跡の再検討

2021. 3.13

講師 種石 悠 (当館学芸員)

北海道紋別郡湧別町川西オホーツク遺跡では、1960年に米村喜男衛らによって、オホーツク文化期の住居2軒と擦文文化期の住居1軒が発掘調査されました。当館の展示にあるクマとアシカ科動物の彫像は、このとき2号住居から出土しました。その後、当館によって、1991～1993年に改めて発掘調査されることになりました。



調査された10軒のうち、2号・3号・4号・8号住居は発掘を終え、その他は部分的な調査にとどまっています。擦文文化期の4号住居を除いて未報告の7号住居跡出土続縄文土器 他はすべて、オホーツク土器のなかでも貼付文土器の時期の住居跡と考えられます。年代は、およそ8～9世紀代です。

今回は、この調査で出土した資料のうち、諸事情により発掘調査報告書に掲載されなかった重要な資料を紹介し、そこから浮かび上がってくる遺跡像についてお話ししました。本遺跡の年代は、主にオホーツク文化貼付文期ですが、他に縄文前期末～中期初頭、縄文中期、続縄文時代、オホーツク文化刻文期、そして擦文文化後～晩期もみられる複合遺跡です。また、調査区の北側にも20箇所余りの竪穴群がありますが、これらは平面形から擦文文化の住居と考えられます。まだまだ未解明な部分が多い遺跡といえます。

(学芸グループ 種石悠)



講座の様子

ロビー展

A.V. スモリヤーク写真展

ロシアの民族学者がみた

1950～70年代のナーナイの暮らし

2021. 4.24 - 5.23

A.V. スモリヤーク (Anna Vasil'evna Smoljak; 1920-2003) 氏は、ロシア (旧ソ連) を代表する民族学者の一人です。特にアムール川流域・サハリンに居住する諸民族の文化・歴史について鳥瞰的な研究を行いました。現地調査は1950年代末～80年代半ばにかけてのほぼ毎年、各回3～5ヶ月かけて行い、30年足らずで当該地域のオロチ、ネギダール、ナーナイ、ニプフ、ウデヘ、ウリチ、エベンキ、ウイルトタの主たる先住民集落をすべて訪問したといえます。

このロビー展では、スモリヤーク氏が1993年 (平成5年) に当館へ寄贈された資料 (写真167枚と録音テープ11点) のうち、1950～70年代にかけてアムール川流域で撮影されたナーナイの写真30点を紹介しました。

30点の写真には、ナーナイの刺繍壁掛け、伝統的な衣類やそれを身につけた人びと、獣皮や魚皮を加工する様子、湖や河川で行われる漁労に関する風景、シャマンによる儀礼の様子などが写されています。本展では、色合いや大きさをイメージできるように、壁掛けや衣服、皮革加工用具、儀礼用具などの実物資料11点も展示しました。

寄贈された写真の原本 (プリント) は大きいものでもB6足らずのサイズですが、B1程度まで引き伸ばしても粗がないほど精緻な画像です。本展では原本をガラスケース内で紹介し、引き伸ばした写真をパネルにして会場内の壁にぐるりと掲示しました。大きな写真パネルで見ると、原本では気づきにくい細かな部分、例えば本誌表紙で紹介した写真では背景に掛かっている布片 (ミオ) に描かれた龍の一部や、漢字を模倣して描かれたような文字にまで目が届きました。

(学芸グループ 山田祥子)



ロビー展の様子

移動展

北方民族の釣針

2021. 4.28-7.11

会場：斜里町立知床博物館交流記念館ホール

主催：斜里町立知床博物館、北海道立北方民族博物館

イヌイトの
角製擬餌針

釣り具のなかでも釣針は、北方民族の工夫が最もよく表れる漁具の1つと言えます。

移動展に関連して、5月2日には移動展会場でギャラリートークが行われました。新型コロナウイルス感染拡大のなかで、6名と参加者は少なかったですが、活発に質問をいただきました。

展示資料のなかに、イヌイトの角製擬餌針があります。これをご覧になった参加者の方が、日本で使われているイカ釣り用の擬餌針に似ている、とおっしゃいました。今回展示しなかったイヌイトの釣針のなかにも、日本のイカ釣り用の擬餌針に形態が似たものがあります。両者の形態が似ているのは、面白い事実です。

(学芸グループ 種石悠)

海岸地域や内陸の河川流域・湖沼地帯で暮らす北方民族にとって、漁労は重要な生業です。北方地域の漁労資源は安定しているため、狩猟経済を補う意味もあります。シベリアや北アメリカのタイガでは、釣り漁・ヤス漁・燻漁・釜漁・網漁・鉤鉈漁・松明漁などが舟を利用して行なわれます。

また、陸獣・海獣狩猟を主な生業とする場合でも、冬季には食糧が不足します。そのため、川・湖・海で釣り漁・網漁・釜漁などの漁労が行なわれ、食糧が補われます。

このように、北方民族の暮らしにおいて重要な意義をもつ漁労活動のなかに釣り漁があります。本移動展では、北方民族が釣り漁に用いる釣針20点を紹介しました。

釣り具のなかでも釣針は、北方民族の工夫が最もよく表れる漁具の1つと言えます。

移動展に関連して、5月2日には移動展会場でギャラリートークが行われました。新型コロナウイルス感染拡大のなかで、6名と参加者は少なかったですが、活発に質問をいただきました。

展示資料のなかに、イヌイトの角製擬餌針があります。これをご覧になった参加者の方が、日本で使われているイカ釣り用の擬餌針に似ている、とおっしゃいました。今回展示しなかったイヌイトの釣針のなかにも、日本のイカ釣り用の擬餌針に形態が似たものがあります。両者の形態が似ているのは、面白い事実です。



ギャラリートークの様子

ロビー展「アイヌ民族の現在1 ラポロアイヌネイション」

ラポロアイヌネイション(旧浦幌アイヌ協会)は北海道アイヌ協会の浦幌支部として1970年に組織されました。現在、会員の多くは漁業に従事し、日常の合間を縫ってアイヌ民族としての活動を行っています。近年はアイヌ民族の遺骨の地域返還を実現し、昨年は丸木舟の復元やサケを迎える儀式アシリチュエノミを実施しました。現在は先住民族の権利として、浦幌十勝川におけるサケ漁業権の復活を目指しています。

本展は当館、ラポロアイヌネイション、浦幌町立博物館の共催により、浦幌町からアイヌ民族の現在の取り組みの一端を紹介します。

会 期：令和3年(2021年)6月1日(火)～6月27日(日)

会 場：北海道立北方民族博物館・ロビー

主 催：北海道立北方民族博物館、ラポロアイヌネイション、浦幌町立博物館

観覧料：無料

関連事業

講座「ラポロアイヌネイションのこれまでとこれから」

2021年6月13日(日)10:00-11:30(延期)

講師：差間正樹、長根弘喜(ラポロアイヌネイション) 持田誠(浦幌町立博物館学芸員)

上映会「北方民族博物館シアター 夏」

2021年6月26日(土)10:00-11:30

講師：野口泰弥(当館学芸員)

解説会「ロビー展解説会(アイヌ民族の現在1)」

2021年6月27日(日)13:30-14:00

講師：野口泰弥(当館学芸員)

第36回特別展「トナカイと暮らすタイガの遊牧民たち」

ユーラシア大陸北部で広く先住民の生業として営まれてきたトナカイ遊牧は、自然環境や携わる民族集団によって、地域ごとに多様な展開をみせてきました。本展では、シベリア東部から南部にかけてのタイガ(針葉樹林)地域に広がるトナカイ遊牧文化について紹介します。

会 期：令和3年(2021年)7月17日(土)～10月17日(日)

会 場：北海道立北方民族博物館・特別展示室

主 催：北海道立北方民族博物館

協 力：NPO法人 北方アジア文化交流センターしゃがあ
観覧料：一般450円、65歳以上300円、高大生200円(常設展とのセット 一般800円、65歳以上300円、高大生320円)

関連事業

講演会「トナカイとの暮らしーモンゴルの森で」

2021年7月17日(土)10:00-11:30

講師：西村幹也(NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがあ/理事長)

特別展解説講座

2021年7月31日(土)10:00-11:30

講師：中田篤(当館主任学芸員)

講座「西シベリアの働き者：トナカイの飼育とイヌ」

2021年8月28日(土)10:00-11:30

講師：大石侑香(神戸大学講師)

特別展解説会

2021年8月29日(日)13:30-14:00

解説：中田篤(当館主任学芸員)

講座「ロシアのトナカイ牧畜」

2021年9月11日(土)10:00-11:30

講師：吉田睦(千葉大学教授)

上映会「北方民族博物館シアター 秋」

2021年9月25日(土)10:00-11:30

解説：中田篤(当館主任学芸員)



塩入れ袋/エベンキ

INFORMATION

行事報告

◆4月17日(土)はくぶつかんクラブ「動物刺繍のマイバッグ」(講師：石原生久代解説員)を開催しました。



うまく作れるかな?



かわいく作れたね!

◆5月3日(月)～5日(水)ゴールデンウィークイベントとして「オリジナルマグネットキット」の配布を実施しました。



配布品

行事の中止と延期

新型コロナウイルス感染症蔓延防止のため、下記の行事を中止または延期しました。

【中止】

◆5月1日(土)解説会「ロビー展解説会」講師：山田祥子(当館学芸員)

◆5月2日(日)上映会「北方民族博物館シアター 春」講師：笹倉いる美(当館学芸主幹)

【延期】

◆はくぶつかんクラブ「皮でつくるタオル掛け」(講師：菅原章子解説員)

◆講座「古代岩絵に魅せられた人々ーシカチ・アリヤンのナーナイと観光者」講師：井出晃憲(稚内北星学園准教授)
◆館長講座「シベリアのトナカイ遊牧民コリヤークーフィールドワークの25年と館所蔵の民族資料」講師：呉人恵(当館館長)
※日程は決まり次第お知らせします。

職員の異動

[採用] 令和3年(2021年)4月1日
塩谷舞(解説員)

北方民族博物館だより No.121

令和3年(2021年)6月25日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市宇潮見309-1
Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org

<http://hoppohm.org>

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会